

村上少尉、「安芸」の彼女との交渉の時空を検証

――丹念な事実確認を積み重ねた首藤滋さんの報告

HOWS 連続講座「大西巨人『神聖喜劇』を読む」第3回は、2019年2月13日に開催されました。参加者は17名。「第三部 運命の章」を対象に、HOWS 受講生の首藤滋さんが報告を担当しました。

労働運動の経験や労働者文学会の事務局を担当している現在について、最初に触れられた首藤さん、『神聖喜劇』を読むのは二回目になるそうです。単行本刊行時に買い求め、傍線を引きつつ読み進めたものの、記憶が曖昧になっていたため、ていねいな再読を心がけたと言います。

「運命の章」は、「混沌の章」を継いで、1941年1月22日の野砲教練の場面が描かれます。苛酷な前線の実態を激越な調子で教育兵たちに語る大前田軍曹の前に村上少尉が現われ、「聖戦」の大義を説きます。二人のやり取りを聞いていた東堂は、村上の引いた大平陸軍報道部長の談話に触発され、過去を想起します。物語は、そこで中断し、招集前の東堂が「安芸」の彼女との逢瀬を回想しながら無名の戦争に身を投じていくことをめぐる自問する様子を詳細に示します。教練の場面に戻ってからは、村上の問いかけに大前田が事実上の不服従を表明し、また、鉢田・橋本二人の新兵が村上の理想的戦争観を平易な言葉で打ち消してしまう挿話が紹介されていきます。

無名の戦争であることを知りながら、進んで身を投じていく選択は、民衆への共感意識ではなく、自己が選ばれた存在であることを試す利己的動機によるのではないか、という東堂の自問自答は、分析的で精細を極めます。時空を往還しながら展開する彼の思考の脈絡を追うのは、簡単ではありません。

首藤さんは、報告で『神聖喜劇』内の記述を歴史的な脈絡の中で精確に把握することを目指しました。言及のある作家、小説、短歌、映画の一つ一つを確認しながら、東堂や村上における意味づけを探ることが行なわれました。また、地図と記述とを引き合わせ、「媾曳」の舞台となった宿の場所を推定したり、東堂と「安芸」の彼女との関わりを年表にまとめたりすることも行なわれました。注釈を付けることは、作品理解に欠かせない手続きであり、首藤さんの周到な説明によって、村上少尉の転身や「安芸」の彼女の悲劇的な境遇が、そして、東堂の入り組んだ思考の脈絡が整理された意義は大きいと思われます。

村上少尉と東堂との比較に関しては、関心のある書物の重なりから、イデオロギー的には対局的でありつつ、ロマンティズムへの傾斜があることで二人が共通すること、『プラークの大学生』を参照して東堂が村上を分身として意識していることが指摘されました。また、「安芸」の彼女については、和歌・英詩に通じている教養や極度の潔癖症などの人物像が探られました。近親者を相次いで亡くし、虚無的な心情に陥った彼女が、無名の戦争における個人の死の意味を切実に問うことは、東堂を深い自省に導きます。二人は、心中の誘惑に駆られながら、「剃毛」の儀式によって自死を回避し、生きる困難を選び取っていきます。「十一月の夜の媾曳」では理想的な男女の関係を描くことが目指され、シナリオ体は必然的な形式である、とのこと。「匹夫モ志ヲ奪フベカラズ」については、村上少尉と大前田軍曹との問答が鉢田・橋本の発言で終息する意義が考察されました。「聖戦」の大義が底辺の労働者の肉声によって覆されること、また、橋本が被差別部落民であることに関わり、近世期の「穢多」をめぐる言説が大量に引用されて、差別の根深さが記されることが、以後の展開にも関わり重要である、と首藤さんは語

りました。首藤さんには、報告を終えて感じたことを記していただきました。ぜひ御一読ください。

歴史的な文脈をていねいに掘り起こした首藤さんの報告は、さまざまなきごとの関連性を気づかせるものであり、刺激を受けて活発な意見の交換がなされました。戦争観をめぐる大前田軍曹と村上少尉との対立から、中世の実践的武士道と近世の理念的武士道との異なりへと話は広がり、さらに、村上の立場が東堂によって「絶対主義的皇国武士道」と呼ばれていることや東堂が父から儒教的な武士道を教えられていることに広がっていきました。東堂についてはほかに、村上に自己の分身を見出す意識や室生犀星『マニラ陥落』について思いをめぐらす部分に注目する必要があるという意見も出されました。広義の理想主義者である村上と東堂とを分かつものとして、部落差別へのまなざしがあり、冬木や橋本との交流を通じて東堂が変容していくことが『神聖喜劇』の根幹であるという理解は、要を得た概括と言えるでしょう。

「大東亜戦争」が無名の戦争であることについては、そもそも無名でない戦争があるのかという疑問が提出される一方、大義との合一感を得たいと願った当時の青年たちの心情は汲み取らなければいけないという立場からの発言もありました。なお、参加者の渥美博さんから講座における意見交換を踏まえた文章を寄稿していただきました。併せてお読みください。

報告者が疑問として挙げ、特に議論となったのは、「安芸」の彼女の名前が不明なことでした。「十一月の夜の媾曳」では「女」と表記され、全編を通じて名前が明かされないのはなぜか。討論では、理想化され、普遍化されていることや現実離れしていることが理由として挙げられていましたが、なお検討の余地があるようです。大前田軍曹の愛人「ミス竹敷」とも関連づけて考えていきたいところです。

「大西巨人『神聖喜劇』を読む」第三部「運命の章」の報告を終えて

首藤 滋 (HOWS 受講生)

この怪物的作品を全体的に論じることなど、私にはまったく想像を絶することであったが、HOWS 事務局から第三部を読む報告を依頼されたとき、私は「よい機会をもらった」と思った。過去に読み進めたことがあったが、分からないところは飛ばして読んでいた。しかしこの作品は本来「飛ばし読み」を拒否する作品だと思われてならない。数多くの引用は、東堂をはじめ登場人物の特徴、時代状況、問題意識を理解するためには必要だとして、大西さんは書き進めたものではないか。逆に引用をある程度理解できれば、読者は作品の内部にそれだけ深く踏み込むことになる。引用に踏み入らずに読んでも、それは上澄みを掬うような作業になってしまうのではないか。私が部分的にもせよ引用に分け入ったのはそういう恐れをもったからに他ならない。それに第三部だけであれば、ある程度やれるのではないかと。

第三部のうち六割の分量をもつ「第二 十一月の夜の媾曳」は、客観的・直接的には召集令状によってではあるが、東堂太郎がどのような気持ちでこの「無名の戦争」に参加して主舞台である対馬の砲兵部隊に来ることになったのかを示す。それは「安芸」の彼女との濃密な交流・交情を通して明らかにされる。大西さんは『深淵』など他のいくつかの作品でも性の問題に取り組んでいる。ところが本作品の読者・研究者の多くはこの第三部第二をまるで読み飛ばすかのように、言及することが少ないように見える。東堂と「安芸」の彼女は、運命的な過去をもち、この時この地で運命的な精神的・肉体的合一を遂げ、「剃毛」の儀式（「身代わり水葬」）を経て、別離を迎える。ここを読み飛ばすことは読者・私にはできないのである。

「第二」の四から六までは、東堂と「安芸」の彼女の対話をシナリオ形式で表わしている。第四部以降にもこの形式は時折採用される。『神聖喜劇』は全体として東堂太郎の見聞、体験、思想を通して語られるのであるが、シナリオ形式では東堂以外の登場人物の気持ち、意見が直接的に表現されることになる。第三部第二における「安芸」の彼女の心情はこの形式で深く生き生きと読むことができる。唐突にみえるかもしれない部分シナリオ形式は、実は大西さんの工夫そのものなのだろう。

村上少尉の皇国思想の元と東堂が判断した日本浪漫派・保田与重郎、また齋藤史の短歌についても私はほとんど理解に貢献できなかったが、いずれも講座参加者から資料の紹介をいただき、感謝している。

前近代・近代・近代の超克——再読して感じること

渥美 博 (HOWS 文学ゼミ会員)

四十年近い歳月を隔てての再読である。結構新鮮な気持ちで読めている。この頃になって『神聖喜劇』に登場する労働者、農民出身の兵士たちのことをもっとよく知りたいという気持ちが強くなってきている。あの兵士たちの魅力は近代的なフィルターを通してはとらえることができない。そういった意味で言うと深沢七郎の描いた農民像と共通するものがあるように思われる。HOWS の「大西巨人『神聖喜劇』を読む」講座は私に再読の願っても無いチャンスを与えてくれた。

ふたつの前近代、東堂における武家社会的な前近代、大前田、村崎、橋本、冬木、鉢田らの農民的な前近代、一概に前近代といってもその有り様はさまざまである。東堂の本家筋の祖先は福岡藩の上級士族である。その家系のうえに東堂の素養がある。労働者、農民出身の兵士たちは、もちろん彼らも義務教育を受けたのであろうが、文字文化の恩恵をあまり受けていないように思われる。論理的、抽象的に考えることが不得手である。物事を直感的、直情的にとらえる。それが巧まない抵抗を生み出し、東堂を驚嘆させる。

東堂太郎のように儒学的、武士道的なものを精神世界の下地にもった人物が、プロレタリア文学、革命文学の主人公として登場する作品を（それは存在するのかもしれないが）私はこれまで読んでことがない。そういった意味でも『神聖喜劇』は非常にユニークな作品なのかもしれない。

近世の儒学的、武士道的イデオロギーは徳川幕藩体制の支配者（武士階級）のイデオロギーとして確立されてきたものである。それは明治維新をへて天皇制国家が確立する過程で、軍人勅諭、教育勅語などの形で、封建的イデオロギーから絶対主義イデオロギーへと換骨奪胎され人民支配の道具とされてきた。儒学的、武士道的イデオロギーが村上少尉につながっていくのは至極納得できるのだが、東堂の自由主義的、民主主義的、社会主義的、コミュニズム的思想とどうつながり、どう融合していくのか大変興味深いものがある。

儒学には元来「放伐」という考え方があるのだそうである。君臣関係において君が無道な行為をしようとした時に、臣は諫めなければならない。三度諫めても聞き入れない場合には義にそぐわない君臣関係だとして臣は君のもとを去ることもできるし、あるいは無道な君を討伐して自らが君になることもできるのである。君臣関係は絶対服従ではなかった。

乱世を克服し、安泰な社会の樹立をめざした徳川政権は、儒学から巧妙に「放伐」を放逐したのであろう。東堂の儒学は去勢されたそれではなく「本来の儒学」につながるものなのかもしれない。

これからも東堂と労働者、農民兵士たちとの関係性に目を凝らしながら読み進めていきたい。そこにはわれわれが資本主義的近代を超克するための重要なヒントがかくされているかもしれないのだ。